

The Influence of Students' Work Experience to Self-evaluation in Practice Training for Childcare Workers

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-09-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀, 科, 増南, 太志 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/366

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



実習の自己評価に及ぼす学生の 社会経験の影響

堀 科・増南 太志

1 はじめに

本研究は保育を学ぶ学生の実習経験の自己評価に関する継続研究である。

近年、保育ニーズの拡大とともに保育のしくみそのものの変革期に来ている。国は平成24年に「子ども子育て関連三法」を整え、認定こども園制度の改善、保育三施設の共通給付のシステムを創設、地域の子ども・子育て支援の充実を目指している。認定こども園の拡充は既存の保育所、幼稚園からの移行も視野に入れており、幼稚園教諭と保育士資格を一体化した第三の資格も議論の俎上にあがっている。

こうした保育のしくみが変わる一方で、保育現場からは保育の質の向上を訴える声が挙がり、平成20年に告示された保育所保育指針では、保育所ならびに保育士等の自己評価とその公表が努力義務として位置づけられた^①。この改訂を基に、平成22年には保育士養成カリキュラムが見直され、実践的な力を強化する内容に変更された。具体的には、子どもの実態に即した科目また保育現場での実習内容を重視する内容に変更された。中でも実習事前事後指導の科目の設置と単位数の増加、また総合演習科目を保育実践演習として位置づけたことの意味は大きく、実習経験を効果的に振り返ることが実践力向上に向けたカリキュラム変更の要であったといえよう。

現場に赴いて実際に保育を経験する実習経験は、学生自身がそれまでの学びを総合的に体得できる機会となり、実習後は学びに向ける姿勢に変容が見られる。これらのことから、実践力を身につけるためには実習経験は学びの核となることが明らかである。こうした実習経験を学びに生かすためには、そこで経験したことをより具体的に振り返ることができることが重要であり、自らの保育者としての有り様を客観的に評価する「自己評価」する力は、専門性の向上さらに保育実践の改善につながる保育士として重要な力であるといえるであろう。

こうしたことから前回、「保育実習の自己評価基準に影響する要因について」（増南，堀2012）において、学生が実習経験を振り返るとき、何を基準に評価を行っているかを調べるため、学生

の①自己評価の判断基準、また②実習評価項目の経験の有無、③社会経験の影響をふまえ、自己評価に影響している要素について調査を行った。その結果、①については、実習先の職員、巡回指導の教員の助言に基づいた自己評価を行っている学生は肯定的な自己評価をしている傾向が強いことが分かった。また②のこれまでの経験が自己評価内容に影響するかを見るための問いに対しては、評価項目にかかわる経験をしてきた学生が多いことが分かった。なお、③の直接的な自己評価項目への影響については、具体的な関連性が見いだせなかった。

これらの結果を踏まえて、自己評価には第三者による何らかの助言が根拠となっていることが明らかになった一方、評価項目を既に経験していた場合においても解答に直接的な影響が読み取れなかったという点が課題として残った。また、そもそも自己評価を正確に行っていない可能性が高いことが示唆された。

1.1 目的

これらのことから、本研究では評価項目にある内容を既に経験していることが、自己評価へ何らかの影響を与えるのではないかという仮説のもと、社会経験とそこで得た力が実習経験とその自己評価に与える影響を調べることを目的に調査を行った。なお、今回は保育所、施設での保育実習を終了した後に調査を実施し、実習経験も保育実習に原則的に限定したが、今回は、実習種別は限定せず、これまでの幼稚園、小学校、保育所、施設等全ての「実習」を実習経験として含めて回答することを認めている。それは、今回の質問内容が資格種別に応じた専門性にかかわらず全てに共通していることが関係している。

これらのことにより本研究では、ひいては保育者養成教育において、実践力のある保育者への育成を目的として実習経験を実りあるものにするため、効果的に自己評価を行い、自らの自己課題を明確にすることにつながる自己評価項目の作成を目標としている。

2 方法

2.1 対象

川口短期大学の学生のうち、平成24年度に実習を実施した学生に対し、アンケートを実施した。回答者は122名であった。

2.2 アンケート項目

アンケート項目には、川口短期大学で実施した実習（教育実習、保育実習を含む）の自己評価と、アルバイトやボランティア等の社会経験に関する項目がある。それぞれについて以下に示す。

2.2.1 実習の自己評価に関する項目

実習の自己評価に関するアンケートでは、態度に関する4つの側面「意欲・積極性」、「責任感」、「探求心」、「協調性」につき、できていたかどうか、難しいと感じたかどうか、反省点があったかどうかの3項目をYes・Noのいずれかを選択させた。また、Yesであれば、その具体的な内容について、Noであれば、その理由について記述させた。実習の自己評価に関するアンケート項目を表1に示す。

2.2.2 社会経験に関する項目

社会経験に関するアンケートでは、学生が実習を実施する前に、アルバイトやボランティア等の社会経験があるか、またそこでの経験と実習での態度の4側面との関連を調べた。具体的には、4種類のアルバイト（「接客業」、「作業系」、「事務系」、「保育・教育・福祉の現場」）及び「部活動」、「文化祭等の学校行事」、「ボランティア」、「その他（具体的な内容を学生が記述）」の計8項目につき、経験があるかどうかをYes・Noのいずれかを選択させた。また、Yesであれば、

表1 実習の自己評価に関するアンケート項目

説明	項目	選択肢
【意欲・積極性】 行動に熱意や誠実さがみられたか。指示を待つ姿勢になっていなかったか。	① 実習で、意欲的・積極的に行動できましたか。	Yes/No
	② 意欲的・積極的に行動する上で、とくに難しく感じた点がありますか。	Yes/No
	③ 意欲的・積極的に行動する上で、もっとこうすれば良かったという反省はありましたか。	Yes/No
【責任感】 言行は一致していたか。指示を理解し、やり遂げていたか。	① 実習で、責任感をもって行動できましたか。	Yes/No
	② 責任感をもって行動する上で、とくに難しく感じた点がありますか。	Yes/No
	③ 責任感をもって行動する上で、もっとこうすれば良かったという反省はありましたか。	Yes/No
【探求心】 質問をするようにしたか。子どもの行動のきっかけや職員の意図を理解しようとしたか。	① 実習で、探求心をもって行動できましたか。	Yes/No
	② 探求心をもって行動する上で、とくに難しく感じた点がありますか。	Yes/No
	③ 探求心をもって行動する上で、もっとこうすれば良かったという反省はありましたか。	Yes/No
【協調性】 助言、指導を素直に受け止められたか。独断的な面や感情にははることはなかったか。	① 実習で、協調性をもって行動できましたか。	Yes/No
	② 協調性をもって行動する上で、とくに難しく感じた点がありますか。	Yes/No
	③ 協調性をもって行動する上で、もっとこうすれば良かったという反省はありましたか。	Yes/No

表2 社会経験に関するアンケート項目

	アルバイト				部活動	学校行事(文化祭など)	ボランティア	その他
	接客業	作業系	事務系	保育・教育・福祉の現場				
経験がある	Yes/No	Yes/No	Yes/No	Yes/No	Yes/No	Yes/No	Yes/No	Yes/No
「経験がある」と回答した場合	意欲・積極性	Yes/No	Yes/No	Yes/No	Yes/No	Yes/No	Yes/No	Yes/No
	責任感	Yes/No	Yes/No	Yes/No	Yes/No	Yes/No	Yes/No	Yes/No
	探究心	Yes/No	Yes/No	Yes/No	Yes/No	Yes/No	Yes/No	Yes/No
	協調性	Yes/No	Yes/No	Yes/No	Yes/No	Yes/No	Yes/No	Yes/No

実習での態度の4側面と関連があるかどうかをさらに Yes・No で選択させ、関連する具体的なエピソードの記述を求めた。また、No であれば、その項目については終わりとした。社会経験に関するアンケート項目を表2に示す。

2.3 倫理的配慮

本調査では、学生に回答させる前に、①回答した内容が成績に影響しないこと、②回答した内容を他者に見せないこと、③個人情報を守ることを口頭および文章で伝え、同意を得たうえでアンケート調査を実施した。

3 結果

回答者122名のうち、欠損値のあるデータを除き、97名が分析対象となった。

3.1 実習の自己評価

実習の態度「意欲・積極性」、「責任感」、「探究心」、「協調性」について、「できた」とする学生の割合、「難しく感じた」とする学生の割合、「反省点がある」とする学生の割合を図1に示した。「意欲・積極性」、「責任感」、「探究心」、「協調性」のいずれの側面においても、「できた」とする学生が多いが、「協調性」に関しては、「難しく感じた」とする学生と「反省点がある」とする学生数が少ない。つまり、「協調性」は他の側面に比べると、良い評価をしている学生が多かった。

また、実習の態度「意欲・積極性」、「責任感」、「探究心」、「協調性」のそれぞれにおいて、自己評価の「できた」と「難しく感じた」の関連性、「できた」と「反省点がある」の関連性、「難しく感じた」と「反省点がある」の関連性を表3に示した。表3の左上を例に意味を説明すると、

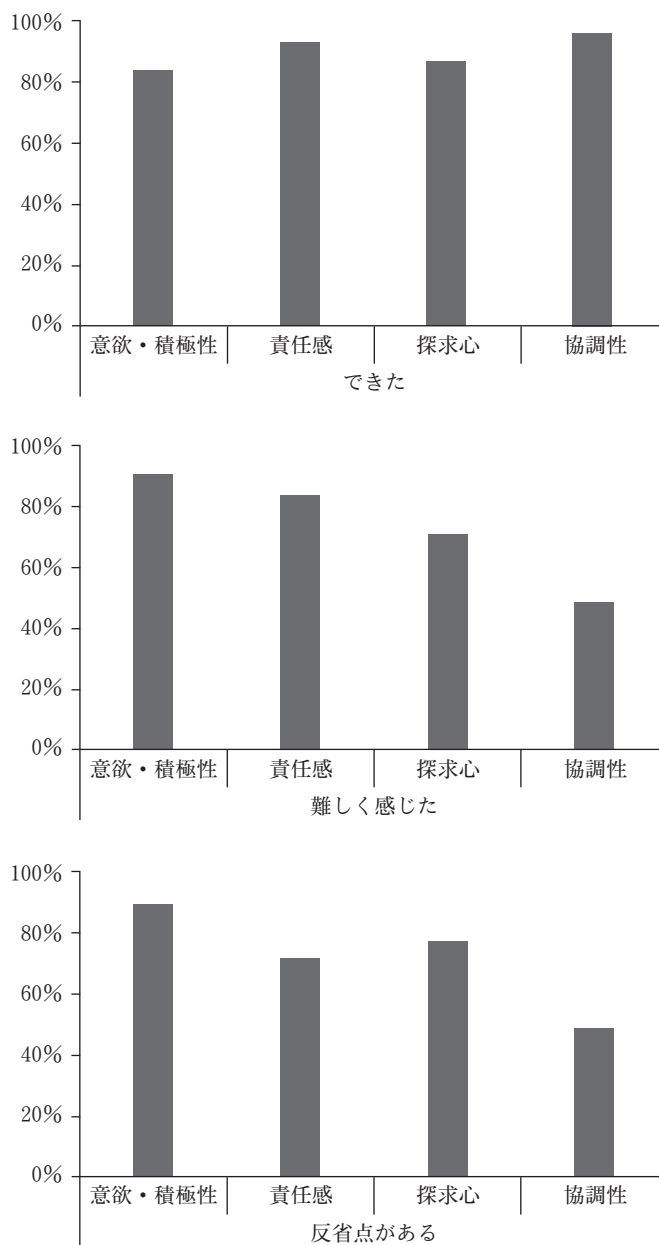


図1 「できた」(上段), 「難しく感じた」(中段), 「反省点がある」(下段) に対する実習の4つの態度

これは「意欲・積極性」に関して「できた」と「難しく感じた」の関連性を示したものである。この表では、実習において意欲・積極性を持って行動できた学生のうち、意欲・積極性を持って行動することに難しさを感じた学生が73名おり、意欲・積極性を持って行動することが難しく

表3 4つの態度のそれぞれに対する「できた」「難しく感じた」「反省点があった」の関係性

意欲・積極性			責任感			探求心			協調性		
	感 じ た く	難 し い く		感 じ た く	難 し い く		感 じ た く	難 し い く		感 じ た く	難 し い く
できた	73	8	できた	77	13	できた	61	23	できた	44	49
できなかった	15	1	できなかった	4	3	できなかった	8	5	できなかった	3	1
					†						
	が あ る	反 省 点		が あ る	反 省 点		が あ る	反 省 点		が あ る	反 省 点
できた	71	10	できた	65	25	できた	65	19	できた	45	48
できなかった	16	0	できなかった	5	2	できなかった	10	3	できなかった	2	2
	が あ る	反 省 点		が あ る	反 省 点		が あ る	反 省 点		が あ る	反 省 点
難しく感じた	81	7	難しく感じた	66	15	難しく感じた	57	12	難しく感じた	35	12
難しくない	6	3	難しくない	4	12	難しくない	18	10	難しくない	12	38
		*			**			†			**

** $p < 0.01$ * $p < 0.05$ † $p < 0.1$ 。

なかった学生は8名であったことを意味する。この表を見ると、「意欲・積極性」、「責任感」、「探求心」、「協調性」のいずれにおいても、「できた」とする学生が多くみられるが、「難しく感じた」や「反省点がある」との関連性をみると、「責任感」においてのみ、「できた」と「難しく感じた」の間に関連性がある可能性があった。つまり、責任感を持って行動できたとする学生ほど、責任感を持って行動することに難しさを感じていた可能性があることになるが、統計的には有意傾向であった（フィッシャーの正確確率検定、 $p < 0.1$ ）。また、「難しく感じた」と「反省点がある」の関連性については、「意欲・積極性」、「責任感」、「協調性」において有意差が示され（フィッシャーの正確確率検定、それぞれ、 $p < 0.05$ 、 $p < 0.01$ 、 $p < 0.01$ ）、「探求心」に対しては有意傾向であった（フィッシャーの正確確率検定、 $p < 0.1$ ）。つまり、「意欲・積極性」、「責任感」、「探求心」、「協調性」に関して、そのような態度で実習に取り組むことが難しかったとする学生ほど、反省点があったと考えているという結果であった。

3.2 社会経験

学生が実習実施以前に、アルバイトやボランティア等の社会経験をどのくらいの割合の学生が経験したかを図2に示した。アルバイトに関しては「接客業」が多く、その他、「部活動」、「学校行事（文化祭など）」、「ボランティア」を経験している学生が多かった。「その他」を記述している学生はいなかったため、これ以降は「その他」を除外して分析を行う。

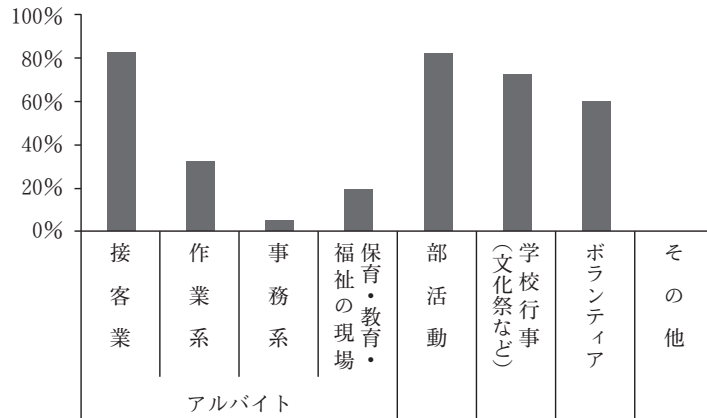


図2 実習実施以前の学生の社会経験

表4 各種社会経験における実習の4つの態度の関連性の比較

実習の態度	社会経験	アルバイト				部活動	学校行事 (文化祭など)	ボランティア
		接客業	作業系	事務系	保育・教育・福祉の現場			
		関連あり 関連なし	関連あり 関連なし	関連あり 関連なし	関連あり 関連なし			
意欲・積極性	76 4	22 9	5 0	18 1	77 3	60 10	54 4	
責任感	75 5	23 8	4 1	19 0	69 11	53 17	54 4	
探求心	57 23	14 17	3 2	17 2	72 8	50 20	45 13	
協調性	73 7	25 6	3 2	17 2	77 3	65 5	55 3	

** $p < 0.01$ * $p < 0.05$ † $p < 0.1$.

また、表2で説明したように、これらの社会経験が実習の態度「意欲・積極性」、「責任感」、「探求心」、「協調性」と関連があるかどうかを調べている。ここでは、各種の社会経験において、「意欲・積極性」、「責任感」、「探求心」、「協調性」のどれと関連が強いと捉えているのかを検討した。表4は、社会経験と実習の4つの態度の関連性を比較したものである。例えば、アルバイトの「接客業」を経験した学生のうち、その「接客業」の経験が実習の「意欲・積極性」と関連があると捉えている学生数は76名であり、関連がないと捉えている学生は4名ということである。統計的検定には、フィッシャーの正確確率検定を用い、5%水準で有意差あるいは有意傾向があった場合は、ホルムの方法により、4つの態度（「意欲・積極性」、「責任感」、「探求心」、「協調性」）について多重比較を行った。

「接客業」に関しては、「探求心」と他の3つの態度の間で有意差が示された。つまり、「接客業」の経験が実習での「探求心」と関連があると捉える学生数は、「意欲・積極性」、「責任感」、「協調性」に比べると少なかった。また、アルバイトの「作業系」と「ボランティア」において、

「探求心」に比べると、「協調性」と関連があると捉える学生の数が多い傾向があった。ただし、「ボランティア」に対しては有意傾向であった。「学校行事（文化祭など）」では、「責任感」や「探求心」に比べると、「協調性」と関連があると捉える学生の数が多かった。これらの結果をまとめると、いくつかの社会経験は実習における「協調性」に影響する傾向があるが、「探求心」にはあまり影響しないようであった。

3.3 社会経験の有無と実習の自己評価

アルバイトやボランティアなどの社会経験の有無と自己評価の関係を表5に示した。この表では、例えば、「接客業」の経験があるかどうかにより、実習で意欲・積極性を持って行動できたかどうかが変わってくるのか、また、実習で意欲・積極性を持って行動することが難しかったかどうか、反省点があったかどうかの違いがあるのかを調べたものである。統計的検定には、フィッシャーの正確確率検定を用いた。表を見ていくと、「接客業」の経験の有無により、探求心を持って行動することが難しかったかどうかに有意差がみられた。表の数値をみると、「接客業」の経験がある学生ほど、探求心を持って行動することに難しさを感じていたことになる。また、「事務系」の経験をしたことがない学生ほど、実習で探求心を持って行動することに反省点があったことが示された。さらに、「保育・教育・福祉の現場」の経験がない学生ほど、実習で意欲・積極性を持って行動することが難しかったようである。

3.4 「接客業」と「探求心」の関係

表5の結果のうち、「接客業」の経験と実習の「探求心」の関係については、経験があるほど難しいという矛盾した結果のように感じられるため、なぜそのような結果になったのかをみていく必要がある。また、表4において、「接客業」の経験が実習での「探求心」と関連がないと捉える学生が比較的多くみられた。そのため、表1と表2のアンケート項目における具体的なエピソード等をもとに、「接客業」の経験と実習の「探求心」の関係について検討していく。

3.4.1 「探求心」と「接客業」経験について

接客業の経験のある学生が、探求心について難しいと考える傾向が強いことから、学生の記述を検討した。該当する値は61回答になった。学生の記述は、大きく次のようなカテゴリーに分類される。

- | | |
|--------------------|-------|
| ① 探求心そのものを難しく感じている | 11 回答 |
| ② 保育行為の具体的内容 | 34 回答 |
| ③ 職員への気兼ねがある | 13 回答 |

表5 社会経験の有無と自己評価の関係

自己評価 社会経験		意欲・積極性				責任感				探求心				協調性													
		できた	できなかった	難しく感じた	難しく感じなかった	反省点あった	反省点なかった	できた	できなかった	難しく感じた	難しく感じなかった	反省点あった	反省点なかった	できた	できなかった	難しく感じた	難しく感じなかった	反省点あった	反省点なかった								
バ イ ト	接客業	あり	67	13	72	8	70	10	74	6	65	15	56	24	68	12	61	19	61	19	76	4	40	40	37	43	
		なし	14	3	16	1	17	0	16	1	16	1	14	3	16	1	8	9	14	3	17	0	7	10	10	7	
	作業系	あり	27	4	30	1	27	4	27	4	26	5	24	7	26	5	24	7	25	6	29	2	13	18	15	16	
		なし	54	12	58	8	60	6	63	3	55	11	46	20	58	8	45	21	50	16	64	2	34	32	32	34	
	事務系	あり	3	2	5	0	5	0	4	1	4	1	4	1	4	1	3	2	2	3	4	1	4	1	2	3	
		なし	78	14	83	9	82	10	86	6	77	15	66	26	80	12	66	26	73	19	89	3	43	49	45	47	
	福祉の現場・ 保育・教育	あり	17	2	15	4	16	3	17	2	17	2	13	6	17	2	14	5	14	5	17	2	6	13	8	11	
なし		64	14	73	5	71	7	73	5	64	14	57	21	67	11	55	23	61	17	76	2	41	37	39	39		
					†																						
部活動	あり	66	14	72	8	73	7	74	6	68	12	59	21	69	11	58	22	59	21	76	4	37	43	36	44		
	なし	15	2	16	1	14	3	16	1	13	4	11	6	15	2	11	6	16	1	17	0	10	7	11	6		
(文化祭など) 学校行事	あり	58	12	64	6	64	6	65	5	59	11	51	19	61	9	51	19	53	17	67	3	34	36	31	39		
	なし	23	4	24	3	23	4	25	2	22	5	19	8	23	4	18	9	22	5	26	1	13	14	16	11		
ボランティア	あり	50	8	52	6	54	4	53	5	49	9	41	17	50	8	45	13	45	13	56	2	28	30	26	32		
	なし	31	8	36	3	33	6	37	2	32	7	29	10	34	5	24	15	30	9	37	2	19	20	21	18		

* $p < 0.05$ † $p < 0.1$ 。

他、無回答3回答があった。

具体的な回答内容としては、①については、該当する61回答中11回答が見られ、「一日の流れ、保育者の言葉がけを記録することが精一杯で、疑問に持つことが少なくなってしまう」、「常に探ることが疲れてしまう原因になった」、「それが当たり前なんだと思ってしまう」というように、探求心そのものを難しく感じる内容が見られ、わからないことを追究する意欲が薄い傾向がみられた。

次に②は具体的な保育行為に対する疑問から、探求心が難しいという回答が見られた。回答数は34回答であり、4カテゴリーでは一番多い回答数であった。回答内容としては、「子どもの行動の意味やどのような声掛けをすれば良いかが難しかった」、「子どもがどんな動きをするか見守っていたりする時、どこまで声をかけていいのか」、「職員がどのような意図でこの行動をしたのかが分からないことがあり、大変でした」、「子どもの関わり方で難しいときがあった」、「保育者の意図や子どもの考えを読み取るのが難しかった」など、保育を行う上での難しさなどを理由にする例が多く見られた。探求心を難しく感じるという内容であるが、より具体的な探求心をもって行動していたことが明らかになった。

③については、回答数としては13回答あった。回答内容としては、「忙しいとき聞いてしまってよいかわからない」、「保育者との人間関係」、「わからないことをきいていいのかわからなかった」、「疑問に思ってもなかなか聞くことができなかった」など、保育者への気兼ねなどから聞けないとする回答が見られた。

4 考 察

本研究では、社会経験とそこで得た力が実習経験とその自己評価に与える影響を調べることを目的に調査を行った。それぞれの考察を以下に示す。

4.1 学生は、実習経験をどのようにとらえているか

実習の態度「意欲・積極性」、「責任感」、「探求心」、「協調性」について、「できた」とする学生が多いことがわかった。これらのことから実習に臨む姿勢については、肯定的に捉えている学生が多いことがわかる。とくに「協調性」について、良い評価をしている学生が多かった。これらの結果により、とくに「できた」と感じた内容として協調性があげられていることから、対人関係については自信のある学生が多いということが読み取れる。

また、それぞれの項目における「できた」あるいは「できなかった」と各項目に対して「難しく感じた」また「反省点がある」との関連性については、「責任感」においてのみ「できた」と「難しく感じた」の間に関連性があり、責任感をもって行動できたとする学生ほど、行動する際には難しさを感じていた可能性が高いことが示唆された。

さらにそれぞれの項目について「難しく感じた」と回答した学生ほど、反省点があったということが結果として表れている。

これらのことから、「意欲・積極性」、「責任感」、「協調性」をもって取り組んだ学生ほど、「難しさ」を感じており、「反省点」があったと捉えていることがわかった。「難しさ」を感じたとい

うことは、実習経験から具体的な学びがあるということであり、また保育に対して深い考察があるということがいえる。こうした学生の記述式の回答を見てみると、次のような内容が見られた。学生 A（回答ナンバー 0008）を例に見てみよう。

「意欲・積極性」について①の問い「実習で、意欲的・積極的に行動できましたか」の回答は下記である。

「最初何をしたら良いか分からない、どうしたら良いか分からなかったが、自分から聞かないと何も始まらないのと、せっかく実習に来ているのに子どもと関わらないのももったいないので、積極的にしました」

②の問い「意欲・積極的に行動する上で難しく感じたことはありますか」については下記である。

「子どもの安全配慮の上で、一人で何人も見てなくてはならず、どこまでがよくてどこまでがダメなのかなどの区分と配慮が難しかったです」

③の問い「意欲・積極的に行動する上で、こうすればよかったという反省点はありましたか」については下記の回答があった。

「目標やねらいを一日ごとに決めて、その一日をそれに沿って頑張るということが抜けていて一つのねらいに対して頑張ろうとしていたのもっと幅広くしたいなと思った」

次に「責任感」については、次のような回答が見られた。学生 B（回答ナンバー 0012。なお、学生の記述は実際の記述内容を内容の儘に掲載する）の回答である。

①の問い「実習で、責任感をもって行動できましたか」については下記である。

「安全に気をつけた。子どものことを第一に考えるように努力した」

②の問い「責任感をもって行動する上で、とくに難しく感じた点がありましたか」については下記である。

「安全に気をつけていても近くの子しか見られなかった」

③の問い「責任感をもって行動する上で、もっとこうすればよかったという反省はありましたか」については下記である。

「もっと全体を見れるようになりたいと思った」

こうした記述内容にも見られるように、「意欲・積極性」ができたと感じている一方で、具体的な保育の事例をあげつつ、難しさを振り返り、さらにより改善に向けた反省点を述べることができている。このことから、それぞれの態度で行動しようと努めつつ、さらに自らの課題を振り返る力が形成されている学生が多いということが言えるであろう。

4.2 実習実施以前の社会経験がどのように関係しているか

実習を実施する以前の社会経験については、「接客業」が最も多く、次いで部活動、学校行事、ボランティアの順で多かった。この社会経験については、前回の調査でも「接客業」が最も多いという結果であった。学生の「接客業」の経験が多い傾向は、接客業を積極的に選んでいるなどの本学科学生の特性であるのか、あるいは我が国の産業構造における割合として「接客業」が多いからであるかなどの所以については、今回は不明である。とはいえ、一般的に「接客業」へ従事することにより対人スキルが向上すること、また人と接することをアルバイトに選択していることは何らかの影響があると予測される。

こうしたことを表すように、「接客業」の経験がある学生は、実習中の態度として「意欲・積極性」、「責任感」、「探求心」、「協調性」のいずれの項目に対して、アルバイト経験が実習中の態度に関連があったと回答している結果となっている。中でもとくに「協調性」については関連があると回答した学生が多く、一方「探求心」にはあまり影響していないとする回答が見られた。

これらのことから、本学の保育を学ぶ学生には「接客業」を経験している学生が多く、そこで実習中の態度の基礎となるスキルを身につけていることが分かった。このことは、四つの評価項目が社会人としての振る舞いに共通する内容であるということが大きく関係していると考えられる。つまり、労働現場において仕事に対する意欲や、責任感、協調性といった態度は、共通して求められるからである。学生の回答結果から、こうした基本的態度を実習前に学んでいることにより、自分自身の置かれている状況を自覚し、またどのような振る舞いが適切かを理解し評価ができていると言えよう。

なお、項目のうち「探求心」が比較的あまり見られなかったという点は、むしろ適切であると考えられる。三つの評価のうち「探求心」については、保育の専門的な関心の深さを意味する。保育の専門職としての具体性を理解しているために、過去のアルバイト経験との共通性を無理に

見いだそうとしていないことが読み取れる。

4.3 社会経験の有無が実習の自己評価へどのように影響しているか

4.2で、実習以前の社会経験により、自己評価へ何らかの影響をもたらす可能性が示唆されたことを受け、ここでは、各項目と自己評価との関連性を具体的に調べた。その結果、回答数の最も多かった「接客業」の経験がある学生ほど、探求心を持って行動することに難しさを感じていたとなった。また、「事務系」の経験がない学生ほど、探求心をもって行動することに反省点があったことが示された。さらに、「保育・教育・福祉の現場」の経験がない学生ほど、実習で意欲・積極性をもって行動することが難しかったとした結果がみられた。

これらの結果について、まずは後者の二つについて考えたい。3.2の図2で見たように、アルバイト経験は「接客業」が82%と最も多く、「事務系」については5%と最も少ないこと、また「保育・教育・福祉の現場」についても20%弱といった結果であった。

こうしたことをふまえて、結果を分析すると、事務系の経験がない学生はつまり事務系以外の職種を選択している学生であり、大多数の学生が該当する。このことから探求心をもって行動することに対する反省点、つまり探求心について何らかの反省的思考が働いている学生が多いということはこの数値は意味している。一方、「保育・教育・福祉の現場」の経験が無い学生が実習で意欲・積極性をもって行動することが難しかったという点についてであるが、「行動することが難しかった」ということはつまり「意欲・積極性をもって行動することに難しさを感じていた」ということである。この結果が意味することは、「保育・教育・福祉の現場」の経験がない学生は、保育の実践的な学びを実習の機会でのみ経験するため、状況判断を含め積極的な振る舞いができなかったということの意味する。学生の記述からこの点を分析してみると、次のような記述があった。

学生C(0029)の記述である。学生Cは、「保育・教育・福祉の現場」経験のない、接客業の経験がある学生であり、「意欲・積極性」に関して難しく感じると回答している。

学生Cの回答は「緊張してしまい少し固まってしまうこと」であった。Cの場合、保育現場への不慣れが、意欲的、積極的に行動することの難しさにつながっていると考えられる。このように、保育者としての資質とは別にこうした状況が影響する可能性があることを示唆している。

最後に最も多かった「接客業」の経験がある学生ほど、探求心を持って行動することに難しさを感じていたとする結果についてである。このことは、先に見たように社会経験として現場に赴く際に必要なスキルと、保育者としての専門的スキルとの差異が表れた結果であると考えられる。社会人として必要な立ち居振る舞いなどの共通性のある内容は経験により補われても、保育の専門的な理解の深さについては難しいということがある。学生の回答例から見ると下記のような記

述が見られた。

学生 D (0033) の回答である。学生 D は、接客業の経験があり、探求心については難しさを感じたと回答している。学生 D の記述では、「職員がどのような意図でこの行動をしたのかが分からないことがあり、大変でした」とある。このことはつまり、保育者の意図的な行為の意味がつかめていないということである。こうした例に代表されているように、保育者の専門的な営みには、保育とは無関係のアルバイト経験では、基礎的スキル向上には直接的に影響しないということがいえよう。この「探求心」と「接客業」の関連性は、次の内容でもう少し詳しくみていく。

これらのことから実習以前の社会経験が、自己評価には少なからず影響しているということが分かった。

4.4 「探求心」と「接客業」の経験の関連性について記述内容から

先にみた「探求心」と「接客業」の経験の関連性について、学生の回答内容がいくつかの傾向に分かれていたため、4つのカテゴリーとして整理したところ、次のような結果が得られた。回答傾向として最も多かったのが、「保育行為の具体的内容」であった。学生の記述内容には、子どもたちとのかかわりにおける専門的な知見からの疑問など、保育を行う上での難しさが表れていた。これらの内容からは、保育者の自己省察的な内容も見られ、専門性を深めたいとした意図が読み取れる。次に多いのが指導していただいている先生方へなかなか聞きにくいといった「職員への気兼ね」ともいえる内容であった。実習は、実際に保育をしておられる先生方から指導を受けて、保育者としての技術を磨くことが目的であるが、時に厳しい指導に躊躇するケースが見られる。こうした職員との関係が、探求心をもって行動する上で難しい要因となっていることがこの結果で読み取れる。このことは、しばしば学生から「先生が厳しいため、思うように行動ができなかった」とする感想を聞くことがあり、保育実習においては決して稀なことではない。しかしながら今回の結果に表れているように、先生方の振るまいが学生の実習態度に影響することが示唆されたことは、今後の大きな課題であるといえよう。

5 おわりに

本研究の結果、学生は、実習態度についての自己評価を肯定的に捉えている学生が多いこと、またこうした自己評価には、実習以前の社会経験が少なからず影響していることが証明された。しかしながら、保育者としての専門的なスキルあるいは「探求心」という点では、必ずしも社会経験が影響しているとは言えないことが分かった。また、保育者として専門的な学びを深めるために必要な「探求心」が、実習先の保育者の態度等により影響を受けていることが示唆された。

これらのことから、実習以前に社会経験があることにより、実習態度において自己評価を肯定的に評価し、または実行している学生が多いということが分かった一方、最も多かった「接客業」を経験している学生にとって専門職としての保育スキルの向上には影響が少ないことが分かった。とはいえ、意欲・積極性といった実習態度のうち最も基本となる意識の高い学生が、探求心に関してもより追究する姿勢を示している点は興味深く、社会経験が専門的スキルに影響が全くないとは言えない。そのような意味でも、何らかの社会経験が、実習により影響を与えているということは言えるのではないだろうか。

今後の課題としては、自己評価は個々の学生によって基準が異なるため、質的な点で標準化が難しい点にある。表層的な自己評価にならずに、かつ学生が自己評価を通してより具体的に実習経験を振り返り、自己の課題を見つけることができるような効果的なプログラムを実習経験後に提供できるよう、工夫をしていきたい。

引用文献

- 保育所における自己評価ガイドライン 平成 21 年 3 月 厚生労働省
増南太志・堀科 (2012) 保育実習の自己評価基準に影響する要因について 川口短期大学紀要 第 26 号
p. 155-166

(提出日 2013 年 9 月 30 日)